

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷六十二第

行發日一月四年三和昭

## 論叢

臺灣の小作制度 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

相續税の補完としての贈與課税 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

保険學の本質 . . . . . 經濟學博士 小島昌太郎

## 說苑

琉球の天然資源と人 . . . . . 法學博士 山本美越乃

コンツェルンに就いて . . . . . 經濟學士 磯部 喜一

委任經理に就いて . . . . . 經濟學士 楠見 一正

フィジオクラートの價值論 . . . . . 經濟學士 山本 勝市

## 雜錄

合理化方法としての經營設備の改造 . . . . . 經濟學士 大塚 一郎

## 法令

米及穀ノ輸入制限ニ關スル件・昭和三年勅令第二十號ノ施行ニ關スル件・前年度概算ヲ施行スルノ件

(發刊)

# 説苑

誤れる植民  
政策の畸形兒

## 琉球の天然資源と人

山本美越 乃

農業(主産物、甘藷)栽培業(主産物、甘蔗)水産業(主産物、鰹)等の方面より觀察したる琉球の天然資源は、要するに前に述べたる所のもの、如くであるが、此の他に畜産業とか、林業、鑛業等の方面は如何と云ふに、琉球の氣候は温暖で春夏秋冬の別なく絶へず緑草を産し、且つ地勢上悪疫等の侵入を杜絶して居る所から、畜産には好條件を備へて居ると言ふことが出来る、故に古來牛馬羊豚を飼育し、殊に馬匹の如きは嘗ては貢物として日本及び支那に献贈したことがあり、又明の時代には馬匹購入の特使が琉球に派遣せられたことさへある位で、昔へは相當良馬を産したものの、如くであるが、其の後全く同種繁殖の自然の状態に放任して、毫も種馬の改良に注意しなかつた爲めに、次第に退化して現今は餘り良馬を産しない、牛羊豚等に就ても亦同様であつて、單に繁殖を計るのみでなく、用畜としての價値を大ならしめんとせば、何よりも先づ種畜の

1) 森島中良著『琉球談』貢物ノ項。

改良を急務とする、近年此の點に幾分注意して改良策を講じて居る様であるが、畜産を琉球の一資源たらしむるには島民の今一段の努力を必要とする、畜産の現状を頭數の上より示せば牛馬は略ぼ同數で各約三萬五六千頭、羊豚は各十萬餘頭で、殊に豚及び山羊の飼養頭數に於ては琉球は恐くは全國でも第一位を占めて居るであらう。

林産に就ては林野地の面積は十三萬町歩餘即ち全地積の約六割を占め地味も概して良好であるが、藩政時代には交通甚だ不便なりしより爲政者は島内に木材の缺乏を感せしむるが如きことなき様殊に林政に注意して、寛永年間に既に山奉行と稱する特別の機關を設けて森林伐採・立木保存及び造林方法等に關する林政を掌らしめ、更に享保年間には此の機關を擴張して山林地方に吏員を配置し一層林政の徹底を計つたが、廢藩後も大體に於て此の制度に據つて林政を處理し來つた、然るに明治三十二年に土地整理法の發布せられたと同時に、其の當時廣大なる面積を占めて居つた杣山を官有地に編入することに決定した爲めに、島民等は將來容易に木材を得ることが出來ないであらうと云ふ不安の念より、遂に濫伐を爲すに至り、之が爲めに森林を荒廢せしめた、夫故に明治三十九年に國有林野地は必要ある部分を除き縁故者に拂下げを爲すべき方針に改め、爾來官公有林は固より私有林にも造林の奨励を爲しつゝあるも、現状に於ては未だ林産資源として之に期待を持ち得る程度に迄は達して居らぬ。

鑛産に於ては石炭・燐礦・銅・硫黃等を數へ得るも、銅及び硫黃は其の量に於ても亦其の價格に於ても左迄重大視すべき程のものではない、併し石炭及び燐礦は天然資源に乏しき琉球には看過すべからざる一資源と稱しても可い、石炭の主産地は八重山であるが、所謂八重山炭なるものは嘉永六年ベルリが浦賀に來り通商互市を請へる歸途琉球に立寄り、全島の地質を調査したる際に發見せられたるものであつて、其の後藩政時代には薩人之が採掘に着手したることあるも一時中絶し居れるを、日清戰役後再び採掘を始め、時に浮沈なきにあらざりしも現今に於ては兎にも角にも鑛區の坪數二百五十萬坪、採掘噸數四萬噸に達して居る、炭質は良好でコークス製造及び汽罐用に適し、從來は臺灣及び支那方面に輸出せられた、燐礦の主産地はラサ島即ち大東島の一分局であつて、同島は明治二十五年に我が軍艦海門に依りて探見せられ、其の後燐礦の豊富なる所より會社を組織して之が採掘に従事することとなり、以て今日に及んで居る。

天然資源より觀察せる琉球自體の實質若くは其の實力とも稱すべきものは、要するに以上述べたるが如きものであるが、然らば是等の天然資源が今日に至る迄事實上島民に如何程の恩惠を與へて居るかと云ふに、此の點に關しては自然は畢竟受働的で、之を善く利用するも悪く利用するも夫れは全く利用者其の人に依る問題であるから、之を利用せんとする島民の勤勉努力の程度如何と云ふことを考慮に入れずしては輕々に論斷することは出來ぬが、併し島民の勤勉努力の程度

如何の問題は後に別に之を論ずることとし、茲には姑く事實を其の儘に觀察して、琉球の天然資源が現に島民に與へて居る恩惠の程度を概評せんに、

農産の方面に於ては甘藷及び米を其の主なるものとして年額壹千參四百萬圓（内、甘藷は七割以上を占めて居る）中、縣外に移出せらるゝものは僅に參四拾萬圓で、他は全部島内に於て消費せられ、尙ほ之れだけでは需要を充たすに足らぬ所から、年々四五百萬圓の農産物の輸移入を爲して居るが、其の主なるものは米及び大豆である、故に差引農産物に於て數百萬圓を縣外に支拂はねばならぬ状態に在る。栽培的産物としては固より甘蔗第一位を占め年額七八百萬圓に達するも、之は大部分製糖原料として島内に於て消費せられて居る。

水産の方面に於ては鯉（漁獲高年額約貳百萬圓）を第一とし、従て其の製品たる鯉節の年額約參百萬圓中貳百五拾萬圓程は移出品として縣外に出づるも、其の他の水産製造物約參百萬圓及び漁獲物約六七拾萬圓は島内に於て消費せられ、尙ほ年々四五拾萬圓の移入を爲して居ると云ふ有様である。

畜産の方面に於ても亦參百萬圓内外の年産額あるも、内輸出せらるゝものは四五拾萬圓に過ぎずして、殘額貳百四五拾萬圓は縣内に於て消費せらるゝ。

林産に於ては百五六拾萬圓の年産額あるも、之を以ては到底縣内の需要を充たすに足らぬ、故

に木材其の他の林産物を合して年額六七拾萬圓の輸移入を爲して居る。

鑛産物は年額八九拾萬圓乃至壹百萬圓の價額の變動により更に夫れ以上の産額に達することあるも、石油の輸移入額參四拾萬圓に上るが故に、差引五拾萬圓内外の縣外移出力があると云ひ得よう。

以上の外工産物としては砂糖壹千貳參百萬圓、泡盛約貳百萬圓、織物約參百萬圓を主なるものとして總額貳千參四百萬圓に達するも、工産物の移出額壹千參四百萬圓移入額約壹千壹百萬圓に上るを以て、差引工産物に於ては其の産額の九割以上が縣内に於て消費せらるゝと同一の結果となる。

之を要するに琉球の天然資源が或は原狀の儘に或は加工變形せられて、其の住民に恩恵を與へつゝある程度を生産物の形に於て評價せば、年額約五千六七百萬圓に相當すると云ふことが出来る、而して此の中より移出總額約壹千六七百萬圓を差引き殘額約四千萬圓と、之に移入總額約壹千八百萬圓を加へて合計約五千八百萬圓なるものは住民の消費する所のものであるが、之に對して生産總額は五千六七百萬圓に過ぎぬのであるから、結局百萬圓乃至貳百萬圓の不足を生ずることゝなるのである、即ち少くとも此の差額だけは琉球住民の負債となつて殘る譯であつて、若し他に之を緩和する方法がなかつたならば、琉球は今日迄に既に經濟的に破産の宣告を受けて居

る筈であるが、幸ひにも縣外への出稼人の送金等に依り、辛ふじて其の負債となるべき分の埋合せを爲して居ると云ふ有様である。

單に其の生活を支ふる點のみより考へても、島民は既に此の如き窮狀に陥つて居る、然るに之に加へて彼等の自ら招きたる苦しみとは云へ、思慮なき急進的の自治の實行は當然財政的自給の重荷を伴ひ、直接國稅・縣稅・市町村稅等を合せて年額參百萬圓以上、即ち平均一戸當貳拾八圓餘の重稅を負擔して居るのであるから、住民の慘狀や推して知るべきである、故に大正十三年度の調査に據れば、縣稅の未收入額拾萬圓餘、市町村稅の滯納額貳拾四萬圓餘に上つて居るのは少しも怪しむに足らぬ。

(註) 以上の計數は沖繩縣勢要覽及び沖繩縣廳の調査資料に據る。

以上は主として琉球の天然資源が現に其の住民に恩惠を與へつゝある程度如何と云ふ點より問題を考察したものであるが、既に述べたるが如く自然は畢竟受働的で、之が完全に利用せられつゝありや否やと云ふことは、全く其の利用者たる人に依る問題である、語を換へて言へば自然の能率を十二分に發揮せしめて居るか否かと云ふことは、其の自然の環境に養はるゝ人の勤勉努力の程度如何に係る問題である、故に斯かる見地より吾人は更に『琉球の人』に就て考察して見る必要がある。

1) 田村浩著『沖繩經濟事情』三六頁。

『琉球の人』に就て知らんと欲せば、彼等並に彼等の祖先の遺した歴史は其の人となりを知るに最も有力なる資料となるのであつて、此の意味に於て吾人は前に比較的長く琉球の史實に就て述べて置いた譯であるが、既に記した如く一千年の歴史を有する『琉球の人』には固より賞讃すべき幾多の美點と、又之を代表する人物が何れの時代にも出て居ることは事實であつて、一部の人の批評するが如くに好ましからざるあらゆる性質を代表せる人々ででもあるかの如くに謂ふことは全く誤れる觀察であるが、併し又他方より之を考ふる時は、國情彼等をして斯くならしめたか、又彼等自らかゝる國情を導くに至つたか、其の何れが因であり又果であるかと云ふ問題は姑く措き、……否恐くは何れも因となり又果となつて居ると觀る方が正しいかも知れぬが……兎にも角にも之を部分的若くは局部的に觀察せずして總括的全般的に觀察して、琉球の人が一般に因循姑息で進取的の氣慨に乏しく、唯目前の事にのみ汲々として遠き將來を慮るの念に乏しいと云ふ點だけは何人も之を否定し得ない様に思はるゝ、而して此の風は女子に於けるよりも男子に於て殊に著しく目立つて見ゆる、此の事はさすがに古くより琉球と交通せる支那人は夙に之を看破したと見へ、冊封副使周煌の著『琉球國志略』卷四下の中にも、

『男子多仰給於婦人、司牝雞之晨者十室而九』

と云ふ簡單にして意味深き句を以て之を形容して居る。又寛政二年森島中良の著した『琉球談』

1) 武藤長平氏著『西南文運史論』三七四頁。



中にも『女市』なる題目の下に、斷片的ではあるが琉球に於ては男子よりも寧ろ女子に勤勉の風あることを窺はしむるに足る次の如き記事がある。

『此國中辻山といふ所の海沿に、早晚(朝晩の意)兩度市あり、商人は残らず女なり、商ふ所のものは魚蝦・蕃薯・豆腐・木器・磁碟・陶器・木梳・草及等の産物なり、其貨物何によらず首に戴き坡(坂)に登り嶺を下るに偏よらず云々』。

又ペルリの琉球記中にも女子の勤勉に反して男子の怠惰なる状態を描いて次の如くに述べて居る。

“In every instance where he (the officer) entered, our informant found that the men were the drones of the hive, and the women the workers.....the poor women might be seen, half naked, delving with the hoe or the spade, in the adjacent gardens, under a scorching sun.....  
.....When the poor females are not thus employed in the cultivation of the earth, there is still found work enough for them of some other kind, for their destiny is labor. In every house may be seen the loom for weaving grass cloth, and it is quite a curiosity in its way.”

『士官の報告によると、男は蜜蜂の雄蜂の如く座敷に這入つて遊んで暮し、女は外でよく働いて居ると云ふことであつた。.....貧民の女は其間半裸體になつて鋤鎌でもつて、互に最寄り

1) United States Japan Expedition, by Com. M. C. Perry, vol. I, p. 219.

の畑で焦げる様な日光の下で、畑を耕して居る、然るに茶や煙草を飲んで居る惰者共は、時によると茶や煙草を屋外にまで持ち出して、枝の擴がつた木影で休んで居ることもある、あはれな婦人は、斯くの如く土地の耕作に従事しない時は、又休む暇もなく他の仕事を作つて、一生懸命に働いて居る、女は何處までも勞働者である、何所の家にも、芭蕉布を織る機が据えられて居る、その機織の方法は大變奇妙である。』<sup>1)</sup>

由來熱帶若くは亞熱帶地方の住民は、氣候の影響にも因るが概して活動的の元氣に乏しく、劣等なる生活程度を以て満足するならば單に生命を支ふるだけの事は、左迄勞せずして其の途を見出し得るが故に、兎角小成に安んじ偷安を事とする風がある、琉球島民も亦此の點に於ては一種の共通性を有し、等しく亞熱帶圈内に在るも臺灣島民とは其の性格に著しき相違のある様に思はるゝ、西村捨三氏が其の著『南島紀事外篇』中に、琉球の農民の生活状態に就て述べて居る事は、又農民以外の多數の琉球島民の生活状態に之を移しても大なる誤りでないと稱して可い、曰く。

『琉球農民ノ概況ハ寔ニ氣樂ナルモノニテ、農具トテハ鋤鎌ノ外ナシ、米田ニマレ麥隴ニマレ蕉圃ニマレ一切鋤一挺ニテ事足レリトシ、其外金類トテハ鍋一ツ限リニテ雜炊ニマレ蒸芋ニマレ豚汁ニマレ一切鍋一口ニテ用足レリトス、茅屋ハ粗木短材ノ掘立柱ニシテ四壁ノ代用ニ蘇鐵ノ枯葉ヲ纏ヒ細竹ヲ以テ插ミ合セ、内部ハ竹簀子ニ筵ロ敷ニテ、凡金五圓ニテ一廬舍ヲ建立シ

1) 神田精輝氏譯『ペルリ提督琉球訪問記』一一五乃至一一六頁。

得ベシ、中ニハ富有ノ者モアレトモ田舎ノ農民ハ瓦屋嚴禁ナルヲ以テ、只大小廣狹ノ差アルノミ、屋舎ハ先ヅ如此、又手金トナリ食トナルベキ甘蔗ハ三年間ハ植付一挿ノ儘採取スベク、蕃薯ハ二年ニ五收シ得ベク、就中蕃薯ハ一反歩内甲ノ部ヲ採食シ乙丙丁ト喰ヒ廻ル内又甲ノ部ヲ採食シ得ベキ姿ニテ、左マデ粒々辛苦ノ憂ヒモナク寔ニ最上ノ食物ナリ、強壯者ハ一日五六斤ヲ食スト云フ、二三縣官ノ田舎ヲ巡回スル如キ一ツノ奇觀アリ、先ツ不馴ノ輿夫持夫共數十人踏踰蹣跚ト隨行シ、最後蒸芋ヲ網袋又ハ細籠ニ入レ瘦馬一二疋ニ脊負セテ尾行セリ、秋夏風早ノ碍リナク蔓生蔽野芋サヘ取入ルレバ綠陰晚涼ニ座シ、鼓腹擊壤帝力何有ト云フヘキ景況ナリ、且衣類ノ如キハ春冬ハ單衣一二枚夏秋ハ蕉布一枚ニテ事足レリトス、亦南徼ノ樂土ナラズヤ」云。

又『衣食住日用風俗ノ事』なる條下にも、

『又上下一般日常ニハ蒸芋ヲ用キ、王家ノ如キモ一日一度ハ蒸芋ヲ用キ、其他ハ二度三度トモ蕃薯是用キ一ヶ月間數度ノ米飯ニ豚汁ヲ用ルヲ中等トスベシ、其他概シテ豆腐ヲ好メリ、市中ソ人立多處綠陰涼風ノ來ルトコロニハ必ス鄙陋ナル琉婦路上ニ豆腐ヲ鬻買セリ、夏氣驟雨ノ節ナド空合雲行キニ依リ壹錢ノ豆腐直ニ五厘ニ下落スル如キ相場一日數度ノ高下ヲ觀ル、又幼豚ヲ市上ニ賣買スルモ女役ニテ、二三匹ノ小豚ヲ細カラゲトナシ、例ニ依リ頭上ニ戴キ豚尿流汗ノ別チモナキ如シ、是等ノ鄙婦ハ袖腕衣熨蕉布ワヅカニ其身ヲ掩フ徒也。』<sup>2)</sup>

1) 西村捨三著『南島紀事外篇』坤二一頁以下。

2) 同書二七頁以下。

と述べて居る、『南島紀事外篇』は後藤敬臣編『南島紀事』と共に明治十九年即ち今より四十餘年前の刊行にかゝるものであるが、四十餘年後の今日に於ても其の生活状態には大差なく、否一兩年前吾人の彼地を視察した時の如きは、更に之よりも甚しき状態をさへ目撃した程である。

其の面積よりしても、天然資源よりしても、敢て多くを期待し得ない琉球の住民の状態にして又此の如くでありとせば、彼等の生活状態に對する向上的自覺心の起らない限りは、又其の勤勉努力に對する反省的自奮心の起らない限りは、將來の經濟的自給力に對しても亦多大の希望を囑し得ないように思はるゝ、若し經濟的の自給力に對して希望を繋ぎ得る見込がないと云ふことになると、島民に與へられたる政治上の權能なるものは全く無意味であるばかりでなく、否却て有害なる結果をさへ齎らさんとする虞れがある、何となれば其の與へられたる自治權に依つて如何なる事を提案し、又如何なる事を決議するも、夫れが公安を害せず良俗に反しない限りは島民の自由であるが、若し其の提案なり決議事項なりが財政上中央政府に煩ひを懸けねば問題とならざるも、中央政府に煩ひを懸くる様のことある時に、政府が其の都度之に應じ得ざるが如き場合が屢々起る時は、(實際問題としては斯る場合が屢々起り得る虞れが多い)、茲に中央政府と島民との間に憂ふべき一種の暗雲を生じ、相互の關係を親密ならしむるよりは寧ろ之を阻隔せしむる危険が多いからである、故に經濟的自給力の如何と云ふ事は琉球の將來を考へる上に極めて重大なる問題となるのである。